

参議院国際問題に関する調査会会議録第四号

平成十六年二月十八日(水曜日)

午後一時開會

二月十七日

加納 時男君

出席者は左のとおり。

理

委員

事務局側

第一特別調査室

渡川
文隆君

参考人

今日の会議に付した案件

東京工業大学大学院社会理工学研究科教授	橋爪大三郎君
一橋大学大学院経済学研究科教授	加藤 博吾
大東文化大学国際関係学部教授	片倉 邦雄君
元駐エジプト大使	
元駐イラク大使	

○国際問題に関する調査
（「新しい共存の時代における日本の役割」のうち、イスラム世界と日本の対応（イスラム社会との相互理解促進のための課題について）

○会長（関谷勝嗣君）　ただいまから国際問題に関する調査会を開会いたします。

委員の異動について御報告いたします。

昨十七日、加納時男君が委員を辞任され、その補欠として佐々木知子君が選任されました。

○会長（関谷勝嗣君）　国際問題に関する調査を議題といたします。

本日は、本調査会の調査テーマである「新しい共存の時代における日本の役割」のうち、イスラム世界と日本の対応に関し、イスラム社会との相互理解促進のための課題について参考人から御意見を伺いました後、質疑を行います。

本日、東京工業大学大学院社会理工学研究科教授橋爪大三郎参考人、一橋大学大学院経済学研究科教授加藤博参考人及び大東文化大学国際関係学部教授・元駐エジプト大使・元駐イラク大使片倉雄雄参考人に御出席をいただいております。

この際、一言ごあいさつを申し上げます。

参考人におかれましては、御多忙のところ本調査会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

本調査会ではイスラム世界と日本の対応について重点的かつ多角的な調査を進めておりまして、本日は、イスラム社会との相互理解促進のための課題について参考人から忌憚のない御意見を頂いて、今後の調査の参考にしたいと存じますので、何とぞよろしくお願いを申し上げます。

本日の議事の進め方でございますが、まず橋爪考人、加藤参考人、片倉参考人の順で一人二分程度で御意見をお述べいただいた後、午後四時ごろまでを目途に質疑を行いますので、御協力よろしくお願いいたします。

それでは、橋爪参考人から御意見を述べさせていただきます。橋爪参考人、お願いいたします。文参考人（橋爪大三郎君） 橋爪でございます。文
問対話の継続というテーマで二十分ほどお話し
たいと思います。

私は、社会学を専門にいたしておりまして、イラムの専門家でないのですけれども、御縁がございまして、外務省で行っておりますイスラムの文明間対話のシリーズがございまして、一昨でしたか、バハレーンで第一回が行われました、昨年東京で第二回が行われました。どちらにも加しております。この次はイランで行われると聞いております。そういう経験も踏まえまして、社会学の見地から文明間対話について幾つか述べたいと思います。

第一に、対話を行う場台には対話の主体はたれのか、だれとだれが対話をするのかということ

が大事になるんですが、ここがまず意外に難しゅうございます。

日本では、外交というのは国が行うものであると、それ以外の団体、地方自治体であるとかは、余りそういう企業であるとか福人であるとかは、余りそういうことは行わないというふうな暗黙の前提があるんですけども、イスラム世界に関しては言いますと、この前提が余り成り立っていないのではないかとというふうに考えられます。

共同体というのが存在するんだという強い信念を
持っております。このイスラム共同体はウンマとい
いうふうには呼ばれておりますけれども、それはま
ず民族を超越しております。ムスリムにはアラビ
ア人もアラブ民族もありますけれども、ベルシャ
人とかトルコ人とか様々な民族がここに加わって
おります。また、政治的國家も超越しております
で、理想的には一つの國家になるのがいいんでし
けれども、歴史的にはいろいろ分裂してきまし
た。こういう國家を超えた存在というのに対する
信仰があります。

その下に國家がありますが、それは世俗の人為的な組織でありまして、日本國家のような重みと力のないが場合もあります。更にその下に地域、社会や部族や家族や、また宗教の宗派ですな、シアラ派にスンニ派、スンニ派の中にも様々な法学派とあるわけなんですけれども、こういう細かなジャンルがありまして、國家の相對的位置が比較的低いということになります。

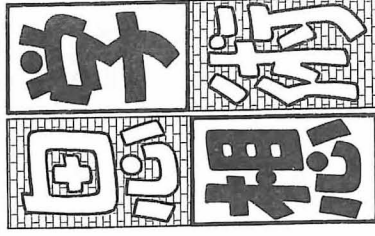
そうすると、**国と国が対話をしてい**ればいいというものではなくて、この各レベルを相手にして、それぞれに納得できるような情報を提供し、対話を続けるということがイスラム圏にとっては大事になります。その意味で、日本に比べます

2004年(平成16年)1月16日(金曜日)

週刊読書人

おまけ (4)

第2520号



橋爪 大三郎著

永遠の吉本隆明

「世説新語」の撰
 摘である。その意味に概
 括するに著者は『世説
 新語』を「ストーリーズ
 の人際争い」なげに理解し
 たることである（本書
 大〇頁以下参照）や、『世
 説新語』の品語論の原
 典の意味を「シニールやサ
 ム・ス・キー」の差をたゞの
 ことと評價している（大〇
 頁以下参照）というは、わ
 たしたちの世説の正本経緯
 にあるが、正本を重くし全
 世説がその宗源性と総体性
 において一貫せねばならぬ
 感嘆——同世代のハナハス
 人なりのローやチウミを
 遇してそれ感したるが如く
 なら——と著者に反省する
 のである。

本書においては、その議論を呼ぶのは、八十年代以降の言本をどう評価するの、わという問題をめぐる構図の尻方・立場である。例えば八十年代以降の言本に、関しては、もっとも端的な評価として「転向説」がな

思想的核心を明確に示す

橋爪社会学との対質化には留保を

順橋高

ななたかしの話値にうかぬ
ひならふたふたのうしろ
の野方にある。この野方は



新書判・190頁・720円
洋泉社
4-89691-771-5

戦前日本の人々の世代が違つては空手取としての仕事を支へたという立場でも微妙にその「チャーミング」は変わつて、本書の著りとも移りぬいた節々だ。である巨三十二画以下の横川社会夢と吉本の馬場夢遊の對比にながつてゆい。とりどりは吉本の原理的かつ「チャーム」にあつて、横川から、といわねば〇年代以降の日本―世界の社会察知ならいつか取った標準をそれら「権力や戦争がない」という条件を前提とする「社会認識」（恒語・専体・権力の三種）にもどういふ分析（定評）が交響される。私はこの点にたいしてある留保をもつておきたい。馬場夢遊とは「折衷主義的」（クレーン）な思考美観を通しで理念論・宗義的規範の次元を描くはずとした重量な議論だからである。今日本の思想に求められしものは理想主義ではなく実践的であり、「チャーム」を含む「批判」の議論ではないところであらう。それを数えてくれるのが吉本などへの返答である。（ただし）、ひょっとしたら早稲田大寺教授・尾藤由香氏）

★はじつめ、たこれら

る。吉本は「消費」の視点に立つようにして資本主義肯定に転じた。むしろなんという立場もある。これについて横井は「吉本隆明は明らかに間違っていた」といっている。大衆の視点に立つとき、左翼たちの見方は逆に吉本のよう

う氏は東京工業大学教授
・社会学専攻。東大大学
院博士課程修了。著書に
「言語ゲームと社会理論」
「仏教の言説戦略」「は
じめの構造主義」「冒
険としての社会科学」「性
愛論」「言語派社会学の
原理」「政治の教室」な
ど。一九四八（昭和23）
年生。

と、国家、国民の輪郭がはっきりしていないと思
います。

また、外交とそれ以外の活動、商売ですとか文
化交流ですとか、ただの友好関係とかいうもの
の区別も余りはっきりしていません。ですから、
私も、私どもは外交というジャンルを超えて対話と
いうものを構想しないと相手に届くメッセージが
伝わらないということがあるのではないかと、こ
れが一のところでございます。

もう一つ難しい問題があるのは、日本とイスラ
ムというものの関係なんですから、日本とい
うのは実は文明かどうかという点が一つ大事にな
るんですけども、私の理解は文化である。文
化であるけれども、文化を超える要素があると。
しかし、いわゆる文明というふうには言えないの
ではないかというふうには思っています。文明とい
うのはいろんな定義、ございすけれども、様々な
民族を含む、様々な国家を含む、単なる文化を超
えたものである。ローマ帝国のローマ文明にせ
よ、イスラム文明にせよ、中国文明にせよ、そ
ういうものなんですから、日本は日本人だけで
できた日本文化を基礎にしたまとまりですので、
文明と言いくい面があります。

しかし、イスラム圏になりますと、これはもう
完全に文明でして、地域や民族を超えた共通の考
え方や行動様式を持っています。日本にはそれに
匹敵するものが実はないので、対話をするときに
象とネズミの対話のような感じになって、対等
でないという感じになることがあります。これを十
分注意するという点が二番目に大事な点かと思
います。

では、対話の前身、二番ですが、対話はど
うやって成立するのかという具体的なところを見
ていきたいんですが、対話を行うためには言葉を使
わなければなりません。対話というのは言葉を使
う交流の技術ですね。その言葉をどうやって見付
けるかということなんですが、普通、言葉を使っ
ているわけなんですけれども、これでは不十分で
はないかと思われま。適切な言葉を使うという

ことは適切な概念を見つけてくるということなん
ですが、しばしばこの対話に必要な共通の概念と
いうのが存在しない場合があるんです。

日本社会をまず説明するというのを考えてみ
ますと、一番簡単なのは、日本人の常識を日本語
で語るということなんです。しかし、ありがちな
ことなんですけれども、一番外国の人が日本につ
いて知りたい情報というのは余りに当たり前の
で、日本社会の中ではそれが言葉にならな
い。逆もそうで、イスラムについて理解しよ
うと思いますと、アラビア語なら彼らの言葉を理解
すればいいのかもしれない、一番大事な情報ほど暗
黙の前提になっていて、彼らが自覚していないと
いうことがあります。

実は、本質的な対話を行うためには、日本で前
提となっている暗黙の価値観や思考方法、これを
客観的に相手に伝える、相手に同じことをやっ
ぱりやってもらう、こういうことをしませんが
、非常に表面的なものになってしまうわけ
です。この作業は案外難しいというふうには思われま
す。

二の二の方に移りますけれども、次に、どうい
う言語で対話を行うかということ実はなかなか
大変で、日本語を使うとしますと、まず相手に
伝わらないということもありますし、先ほど申し
ましたようにまず概念がないということなんです
ね。実用上やはり英語を使うというのが適当な方
法も分かります。英語は日本にとってもイス
ラム圏にとっても外国語ということになり、英語
を話す知識人が大勢いるわけで、交流はできるん
です。ただ、英語というのはやはりキリスト教を
ベースにした言語であるために、日本文化やイス
ラム文明を表現するのに不適切な場合も多々ある
わけですね。簡単に言う、バイアスが掛かってし
まうわけですね。このことを取り除く方法とい
うのを十分考えないならば、英語を使う対話とい
うのは大変危険になります。

では、アラビア語を使えばいいか。これもなか
なか難しく、アラビア語ができる日本人の絶対

数が大変に少なくなっています。さらに、困難な
問題として、現代日本語はアラビア語と対応す
ようにできていません。英語やフランス語、ドイ
ツ語は、明治の翻訳文化の関係でほぼ対応する語
彙が日本語の中にありますので比較的簡単なん
ですけども、アラビア語と日本語は対応が付か
ないので、アラビア人にとって大変重要な概念を、
では日本語でどう表現するかというときに大変難
しい。こういうことからして、かなりの困難があ
るということを利用して、いただいたわけ
三番目に、異文化を理解する場合の一般的な問
題として、誤解が避けられないということがあ
ると思います。

相手社会は、まず説明を理解する場合に、自分
になぞらえて、自分の中に似たようなものがあ
った場合に、相手もそういうものであるというふ
うに理解するわけですね。例えば、ビザであ
れば、お好み焼きのようなものであると考えると
応理解したことになるわけですが、実は大分違
いますね。これは理解であります、誤解です。そ
ういうわけですね。

そこで、対話をするには、相手がこういうこと
を誤解するであろうということを織り込んでメッ
セージを送らなければ、誤解がそのままになっ
てしまいます。これはかなり事前の対話の準備とい
うものが必要になりますし、相手の考え方とい
うものを十分理解してないければ、この誤解を避け
るということとは不可能なんです。

そこで、対話に即しましては、こういうふう
に理解してくださいという相手の文化における脈絡
をこちらから示唆するという方向で対話するのが
大変望ましいと思えます。

例えば、天皇と将軍の関係について説明しよ
うと思えば、天皇はカリフのようなものであ
ると、将軍はスルタンのようなものであると言いま
すと、イスラム圏の人であれば、あなるほど、
そうかと。カリフの方が偉くて、スルタンはカリ
フに任命されるんだとか、そういうふうにある程
度の即時に理解できると思えます。しかし、カリ

フとスルタンは、天皇と将軍の関係とは違うわけ
ですね。ですから、「のようなものであるが……」
と言って、その後、更に補正をする必要がありま
すね。こういうふうな努力というものが対話では
ないかと。

こういう注意を欠いたまま、対話をすれば理解
が深まり、理解が深まれば友好が増進されるとい
うふうに短絡的に考えて対話のチャンスを増や
す、予算を付けるというふうなことは思うよう
な効果が上がらないというのが私の予想です。
例えば、キリスト教圏とイスラム圏ですが、対
話をすればするほど仲が悪くなってしまうという
側面があつて、初めから対話をあきらめていると
いう側面もあります。対話をすれば仲良くなるで
あるというのは日本の一種の文化的な前提なの
であつて、これはこちらの側での思い込みです
ね。ほかの文明圏がそういうふうには考えていると
は限りません。こういうふうなことが実際に対話
を行う場合の注意点かと思えます。

三番目に、では、政府なり国がどのように文明
間対話を支援すればいいかということなんです
が、私が思い付く提案を三つほど述べておしま
し。

まず第一に、日本社会が理解される、それから
相手の社会が理解できる、これにはいわゆる文化
交流にとどまらない大きな利益があるんだとい
うことをよくよく認識すべきであると思えます。
ちよつとプリントがミスプリになっております。
最後の利益は「べき」というふうにならな
ければと思えます。

安全保障にとつても、経済にとつても、文化交
流にとつても、相手の社会の利益は不可欠な前提
になるというふうには思えます。なぜかという
と、相手の思考と行動が予測可能になるからでして、
これは大変に大きな情報になります。また、当
方の思考と行動も相手に予測してもらえるという便
益がありますから、信頼を築くことができます。
その利益に見合った資源を事前に配分してお
く、対話インフラを整備しておくということは国

の適切な行動になると思うんですけども、一つ
考えられますのは、日本の基幹図書の計画的翻訳
であります。イスラム圏は大変出版事情が悪い
しくて、出版点数も少ないですし、そのうち日本
に関するものは数えるほどであるというふう
に聞いております。一般のアラビア語の読者が日本に
ついて知る機会是非常に少ないのです。ですから、
日本にとつて非常に基本的であると思われる
書物、古代、中世、近代のもの、そして重要な思
想家のもの、文学の作品、政治的な経済的なテク
ストのようなものを計画的に翻訳していくと、こ
れは文部科学省ないし文化庁の任務ではないかと
思われます。

二番目に、文明を継続的に研究する機関とい
うものを設置することも大事だと思いますが、日本
にとつて大事な外国、例えばアメリカとかイスラ
ム圏というふうなものに対する研究所というものが
実は日本に余りないので、戦略的な総合的な研
究というのが推進していくうらみがあります。こ
ういうものも必要かと思われま。

さらに三番目として、文明間対話を長期的に進
める計画として、即するのための競争的研究費を
配分していくということも大事であろうかと思わ
れます。

簡単にございしますが、ほぼ以上でございま
す。○会長(関谷勝嗣君) ありがとうございます。
次に、加藤参考人から御意見を述べたいだ
きます。加藤参考人、よろしくお願いま
す。○参考人(加藤博君) 私の方は、イスラム圏が非
常に広いので、私の専門であります中東、そ
れも私が日ごろ接しております中東研究に関
することに限って少しお話をさせていただきたい
うふうには思っています。

レジュメに沿って話を進めていきますが、ま
ず知っていただきたい第一点は、我が国の中東研
究者は、ここへ来まして、好むと好まざるにか
わりなく、学問の国際化の波をもろにかぶら
うとしております。つまり、経済の世界に始まる
グローバル化の流れは中東研究の世界にまで及んで

おりまして、この流れは二〇〇一年九月十一日
の米国での同時多発テロ以降、急になりました。
私が個人的に関係した中東研究のグローバル化
を取り上げまして、レジュメに書きました二
つの企画があります。つまり、第一中東学会
大会の開催、これは世界各国の中東学会に
かけて開催されたものです。今年は、去年第一
回で、今年はアメリカ、次は恐らく中東でな
されると思えます。

二番目が社会科学部研究評議会、ソーシャル・
サイエンス・リサーチ・カウンシル、略称皆
はSSRCと呼んでおりますけれども、による中
東・北アフリカのプログラムです。とりわけ
SSRCの企画というのは、現在中東研究にお
いてどのようなグローバル化が進んでいるかとい
うことを端的に示す企画であると思えます。

SSRCというのは、社会科学部を振興、社会科
学の振興を目的に一九九三年アメリカ合衆国に
設立された非利益、非政府系の独立団体です。
これまでアメリカ合衆国の若い社会科学者を
支援してきましたけれども、近年はその援助の
対象を世界各国に広げつつあります。このSSRC
は、二〇〇一年九月十一日の同時多発テロを契
機に中東・北アフリカ・プロジェクトを立ち
上げ、中東研究の組織化に動き出した。実はそれ
以前においては、アメリカ政府の方針もあつて、
中東研究というものの対するお金もカットされ
てきたんですけれども、この同時多発テロ以降、
急に予算が増えるとともに、この言わばNGO
体であるSSRCもそれに伴って企画を立てた
ということですね。

アメリカ合衆国という国における政治と学問
とりわけ利益に直接関係するような地域研究に
おいては非常に微妙な関係があるというこ
は、配りました新聞、朝日新聞の記事を見ていただ
きだけでもお分かりになると思えます。とりわけ
二段落目の最後の方、「法案の支持者によれば、
米国の中東研究の多くは親アラブで反米のバイ
アスが掛かっており、利益を害する研究に税金を

与える訳にはいかない」という、これは極端な例
でありましようけれども、アメリカ合衆国とい
うのが利益に関する地域研究の場合にはこのよう
な形で議論を行ってきているということを知
りたがたいというふうには思えます。

このSSRCですけれども、この企画の手始め
として、中東研究にとつて重要と思われるフラン
ス、ロシア、日本の三か国の研究者を招きまし
て、それぞれの国の中東研究の現状と今後の課
題について意見を交換するという機会を何度も
持っています。その目的は、北米中東学会、ア
メリカの場合には北アフリカ、カナダと一緒に学
会を行っておりますので北米中東学会と言っ
ておりますけれども、この学会が行ったと全
く同じフォーマットでそれぞれの国の中東研究に
対するアンケート調査を実施するように提案す
ることでした。

招集されたフランス、ロシア、日本とい
う三か国の組合せというのは実に絶妙でありま
した。中東研究の長い歴史を持ち、アメリカ
の中東研究に対しては一家言を持つフランス、東
洋学の伝統を持ちながら旧ソビエト連邦の崩
壊によって一から中東研究を始める必要にな
ったロシア、それから、中東から遠く離れて
いるにもかかわらず中東研究に比較的多くの金
を使っている日本という組合せだからです。
何やら現在の国際関係の縮図みたいなことが
展開されているわけでありまけれども、議論は
当然それアメリカ主導のグローバル化は可能
であるのか、あるいは、そもそもそのような
グローバル化は必要であるのかということ
をめぐる展開してきました。

様々な意見がぶつかり合いましたけれども、こ
の御時世にどの国であってもアメリカの提案を
拒否することはできないわけであり、結論とし
て、三か国においてできる限りの統一的なフォー
マットでアンケート調査を実施して、世界の
中東研究関係の情報を共有しようということ
になりました。

二番目に入りましようけれども、じゃ、我が
国の中東研究者はこのようなグローバル化の
動きをただ手をこまねて見ているかという
こと、そうでは決してありません。という
のは、この流れの中で実は実にうまく立ち
回ってきたと私は思っています。

一九八五年には、地域研究の学会として日本
中東学会が結成されました。それまで中東
研究がなかったわけではありま。ないどころ
か、我が国の中東研究の水準と蓄積は大した
もので、それは伝統的な東洋学の一環として
なされてきた。
日本中東学会で目指されたのは、中東を一つ
の地域としてとらえ、地域としての中東を
総合的に理解することでした。こうして中東
を総合的に理解するための人文・社会科学
としては大掛りなプロジェクトが組織され
ることになりました。それは、詳しくは省
きますけれども、イスラムの都市性のプロ
ジェクトというものの、あるいはイスラ
ム地域研究プロジェクトというもので
した。

この二つのプロジェクトの担い手は、主として
中東研究者でした。しかし、ともにイスラ
ムを標語にしていることが示すように、この
十年、二十年中東研究の地域的な重点は中東
からイスラム世界へとシフトしてしま
した。その背景には、当時の指導的中東研
究者が次のような二つの時代の流れに
敏感で、それに鋭く反応したからだと思
います。

第一は、一九八〇年代になりまして、それ
までの政治イデオロギーでありましたアラ
ブ民族主義など世俗的な民族主義がその
権威を失墜させられて、それに代わって
イスラム運動が国際政治経済の場で注
目を集めるようになったこと
です。

第二は、ほぼ時を同じくして、我が国
において自然科学のみならず、人文・社会
科学研究においてもプロジェクト単位の学
際的研究活動の必

要性が自覚されるようになったということです。その結果として、近年における我が国の中東研究は量的にも質的にも飛躍的な発展をし、研究の国際化もまた大いに進捗したと思つています。

また、我が国の中東研究者は、さきに指摘しましたようなアメリカ主導の中東研究のグローバル化に対処しつつ、独自の研究のネットワークを作るといふことも試みてまいりました。

その一つが外務省の主催する日本とイスラム諸国の知識人との間の文明間の対話プロジェクトへの参加でありました。こうした個人レベルの活動のほか組織レベルでも、日本中東学会はさきに指摘した中東学会世界大会への参加のほか、アジア中東学会連合を八年前に組織いたしました。東アジア三國、日本、中国、韓国における研究者の交流を図つております。誠に残念なことな

んですけれども、さきの第一回中東学会世界大会に非欧米の学会で公式に参加を申し込んだのは日本中東学会だけでありました。これは、これから二十一世紀にとってアジアが重要なことを考える

と非常に残念なことでありましたけれども、現実

に今の世界の東中研究の現状ではそういうことになつています。

その我が国における中東研究の特徴というのは、時間の関係上詳しく申し上げませんけれども、レジュメに挙げた三点です。

第一は、好んで地理的、客観的空間としての定義の困難なイスラム世界を一つの地域として設定し、研究対象とするということです。二番目は、イスラム世界から、現代まで、長いタイムスパンの中で事象を研究対象としているということです。三番目は、地域密着型の人文社会研究が多いということです。

この特徴は、お配りました日本中東学会会員構成からも読み取れると思つています。時間がないので解説しませんが、歴史家が多いとか、それからアカデミシャンが多いとか等々、いろいろありますけれども、もし時間があれば見ていただければと思つています。

研究を持ち掛けて、研究のための収集した情報を共有しようと思つたんです。ところが、共同研究はともかく、情報の共有はことごとく拒否されました。お金を出してくれれば調査報告書は与えますけれども、分析の基になつたデータ、情報は参照させないというわけです。

彼らの主張も分からないわけではありませんが、現任でも、エジプトでは自由にエジプト研究者でさえ社会調査等々ができません。したがつて、外国人研究者が社会調査をするためには長い時間を掛けて国から調査許可証を得なければなら

ない。このようにして得たデータ、情報を、共同研究者として金を出さずからといって、そうやすやすと日本人研究者に与えるわけがないというふう

に思ひます。

そこで、私は頭を切り替へまして、欧米の研究機関に頼りに、欧米機関を頼りにせずにか日本独自のチャンネルでエジプト当局に直接働き掛けてデータ、情報を得ることができないものかと思つたわけです。

行つたことは二つでして、第一は、日本大使館の文化センター、日本学術振興会、日本国際交流基金、JICAなど、カイロにある研究に

関係する日本の機関に助力を求めることです。第二は、エジプトでの社会調査の許可証を出す中央統計局に直接掛け合ふということでした。

結果としては、多くの偶然も重なつて、その一つは、アメリカと、アメリカ人研究者としては、一緒に研究をしたくないという何か面白い理由もあつたのでありますけれども、日本人研究者として初めてエジプトでの社会調査の許可を得て、一昨年より中央統計局との合同研究という形で、エジプト都市部、農村部での大規模な世帯調査を行うことができるようになりました。現在でも行つております。その過程で接触した日本の諸機関から様々な援助、助けをいただきましたが、もう時間がありませんけれども、レジュメで指摘した三点でありまして、日本独自の情報収集が是非必

これは、SSRC、さきに述べましたSSRCの会合のために私の親しい研究者が作成した資料の一部です。現在、日本中東学会のメンバー数は約六百五十名、ここ数年、毎年四十名程度の新規加入があります。ですから、地域研究学会として比較的活動に活動している部類ではないかといふふう

に思つています。

そこら我が国の中東研究ならではの多くの成果が生み出されてまいりました。その最大の貢献は、我田引水的な発言でありますけれども、言わば現実には存在していないとも言えるイスラム世界という地域単位を設定することによって、従来の地域研究では無視あるいは軽視される嫌いのありました国家を超えるグローバルな問題群に光を

当てたということですね。

今、橋爪先生が日本とイスラム世界の理解の困難を御指摘くださいましたけれども、正にそのとおりでありますけれども、日本はどうして文明だとかイスラムに興味を持つのかというの、恐らくこのような研究者のありようと深く関係していることではないかといふふう

に思われます。

次に、三番目に参りますけれども、よくあることとありますが、長所と短所というのはコインの裏表のようなものでありまして、時として長所と

いうのは短所となつたり、あるいは短所を映し出す鏡となります。つまり、これまで述べてきた我が国の中東研究の特徴は、同時に我が国の中東研究に何が足りないかをよく示しています。

それを一言で述べれば、地域研究に対する評価としては誠に逆説的なものでありますけれども、なぜならば、地域研究と称しているわけでありまして、けれども、我が国の中東研究には地域性が極めて希薄だということですね。

このことをもつと具体的に整理したのでレジュメで指摘した三点です。第一番目として、基礎研究が多くて応用あるいは政策提言志向の研究が少ないということです。第二は、現代関係の研究が少ないということです。三番目は、社会科学関係の研究が少ないということです。

要である、二番目は、連携した、日本の諸機関で連携した情報収集システムが是非とも必要である、三番目は、社会との接点の中での情報収集が必要であるということです。是非とも

を挙げた日本独自の情報を収集するチャンネルやシステムを作つていただきたいといふふうに私は思ひます。

パレスチナ・イスラエル紛争だとか石油だとかイスラム、この三つのある中東は恐らく今後の世界政治経済において最も戦略的に取り組まねばならない地域の一つであると思ひますので、そのことが日本の利益にもつながると思ひますので、是非考えていただければといふふうに思ひます。

濟みません、ちよつと時間が長くなりましたけれども、以上で私の報告を終わります。

○会長 関谷勝嗣君 ありがとうございます。

次に、片倉参考人から御意見を述べさせていただきます。片倉参考人、お願いします。

○参考人 片倉邦雄君 私は、四十年ばかり外務省に勤務した者でございます。アラビストとして一九六〇年の中東の現場を踏んだわけでございます。湾岸のサウジアラビア、イラン、イラク、そして最後にエジプトで上がったわけでありまして、私の述べますことは、決して理論的に精緻なことではなく、むしろ実践的な体論論でございます。何と

にかひひり出してどういふふうにするか、ハウツうといひますが、今後一休何を日本としてしていったらいいかといふところに絞つてまいりたいと思ひます。

やはり、西アジア、中東とは日本は一万キロも離れておりまして、歴史的な関係も非常に希薄であつたと。明治維新前後まで日本はほとんどノータッチであり、やはりイギリス、フランス、ロシア、そしてアメリカの影響力を、アメリカが影響力を行使する地域であつたわけでありまして、これがくつと日本に近づいたのは一九七三年、油がアラブかと言われました第一次石油危機、オイルショックのときでございまして、経済エネルギー交流といふものが主体となつて、このときは

確かに、これからの我々の社会というのは国家の枠組みを超えたグローバルな圏域で大きく変容するものと予想されます。しかし、だからといって国家が消えるわけではありせんし、これから政治経済はもうろん、文化交流でさえ依然として国家単位でなされるに違いありません。にもかからず、イスラム世界という地域を設定し、イスラムという宗教を研究の中心に置くならば、国家権力の磁場が生じている中東における現実の政治経済・社会問題をばやきさせ、分析し損なうのではないかといふわけですね。

こうして、善きにつけあしきにつけ、我が国の中東研究の特徴を成してきましたイスラム世界という地域単位で研究することに対する批判は、とりわけ現代研究を志す若い世代の研究者の間で最近強まつていまして、恐らく、それに対して我々シニアの方も対応しなければならぬといふふう

に考えているわけですね。

最後、大きなことは言えませんが、個人的な観点から、日本におけるイスラム世界理解の促進に何が必要なのであろうかといふことを簡単に五分ばかりで述べさせていただきます。

それでは、どうすれば中東を少しでも理解できるようになるかといふことでありますけれども、中東理解の手段としてすぐに思ひ付くのは、レジュメで挙げました対話と情報収集ということ

です。

対話については、これは先ほどの橋爪先生と正に同じことを言おうとしてゐるわけでありましてけれども、現在進められてゐる文明間の対話を含め様々なレベルで一層推進してもらいたいと思ひますし、しなければいけないと思ひます。

しかし、対費用効果を考えると、対話は大変だろなと人ごとがなつて思ひます。というのも、中東は第一に、国家と社会が乖離している、国家で考へてゐることと社会、人々が考へてゐることが必ずしも一致していない、あるいは非常に離れてゐるということですね。第二に、様々な民族、宗教、宗派から成る複合社会であるということ

で、平和裏に交流が行われたといふわけでありまして、商品として日本に安定供給を受けるために努力したわけでありまして、これがより深刻な、真摯な大規模な日本人と中東、イスラムの人との接点に発展していきま

すのは、今から十三年前の第一次湾岸危機のときでございまして、これは非常に厳しい経験を強いられたわけですが、二百五十人から成る女性や子供も含む邦人質が拘束されたといふこと

であります。

今回、イラク戦後に発展しております状況で、これは、政治的な立場は是非、いろいろ今激しく論じられてゐるところでありますけれども、数百名あるいは千人に上る自衛隊員がこのイスラム世界の一角である南イラク、サマワに入つていくと、そしてイスラム社会とコンタクトを行うと、場合によつては、特にこれらの住民の対日理解がうま

くない場合

は犠牲者が出ると。もう既に外務省の優秀な二人の職員が犠牲になつておりますけれども、血が流れると。こういう非常に深刻な事態が予想されるところ。こういう意味で、正にイスラム諸国における対日理解の促進といふことは焦眉のことであるといふふうに考へております。

メモ書きに入りますが、第一は、ちよつと走つてまいりたいと思ひますけれども、歴史的に見た場合に、言わば日本に対するイスラム諸国の古典的なイメージ、古典的なイメージといふのは日本の敬意、あこがれであつたといふわけでありま

す。そして第三に、住民、多数住民の宗教であるイスラムは、イスラムには中央集権的な権威が存在しないといふこと

です。

この三つを考えると、一体だれと対話をするのかといふことを慎重に見極めないと、その効果が期待できないといふことですね。現実には、イラクの統治の問題において、一体だれといふのは、この三つの点において非常に重要であつて、かえつて対話する相手を選違へると事を複雑にしてしまふといふことが中東にはよくあります。

第二の情報収集については、これは全くの個人的な体論を言へばさせていただきます。

ここでの情報といふのは、我が国の中東学会で欠けてゐると思はれる社会科学関係の情報です。人文科学関係の情報については、既に述べた我が国の中東学会の特徴を反映して大変な蓄積があります。したがつて、ここでは述べません。更に一層蓄積が進むことを私は望んでおります。

私は、経済学部

に所属してゐまして経済史を担当しております。しかし、私の経済史というのは経済というよりも歴史に重点が置かれたものであります。実際、個人的には、ほくらにまみれた文書を解説してこれまで知られなかつた世界を復元することに喜びを感じるようなたぐひの人間です。

しかし、五十を過ぎまして、自分の楽しみだけの研究もあるまいと思ひまして、少しは人様に、なるために、何かをと思つて思ひ付いたのが、さきに挙げた我が国では欠けてゐる社会科学的中東研究にどう道筋を付けるかといふこと

です。そして、社会科学的研究といへば、何よりも経験的なデータ、情報、それも自ら得るデータと情報の収集が不可欠です。ところが、この出発点で私は暗礁に乗り上げてしまつた。

まず、アメリカ、フランス、エジプトの研究機関、とりわけ体系立つた研究システムを持つアメリカとフランスの研究機関にまずアプローチをしました。既に現地の社会調査を始めとした情報収集の経験を積んでおります欧米研究機関に共同

さらに、時代が下りまして、日本での太平洋戦争以前あるいは戦中の回教研究熱といふのは著しく高まつた。この国会におきまして、帝国議会でもありますが、昭和十四、五年に谷外務大臣が日本の回教政策といふことで議会演説をしてゐる記録が残つております。また林銑十郎首相が日本

のイスラムの父として、そういう名前をもらつたこともあります。すなわち、主として日本がエネルギー確保のために目を向けていた南方、現在のインドネシア方面で宣撫工作とか占領政策の一環としてこの回教研究が使われたという歴史があります。

しかしながら、イスラム教徒はキブラ、すなわちメッカの方向しか祈らない。そちらの礼拝の方向は決まつておるわけですが、宮城運轉を強いて反発を招いたといふような記録が、ここにあります。齋藤鎮男元大使の「私の軍政記」などでも残つております。

戦後になりますと、やはり日本の独自のエネルギー開発といふことで、出光の日章丸事件とかアラビア石油の第一号井の成功と、カフジでありましたけれども、これが起こつてまいりまして、イスラム諸国において日本は独自のエネルギー開発に乗り出してきてゐるといふこと

で、この民族、こ

日イメージも変化してきているということを描きたいと思ひます。

これは、彼らの方が変わつてきていると、民族主義からイスラム回帰へ。これは一九七九年のイラン・イスラム革命くらいから非常に明らかになつてきておりますし、この二ページ目のところに現在も使われているイラクの国旗が図版でございしますけれども、イラク共和国、サダム・フセインの下でアメリカに、あるいはサウジアラビアに対する敵意ということで、我々の方がイスラム世界では本尊であるというような考えで、第一次湾岸危機の際に、国歌に、アッラーホー・アクバル、神は偉大なりというものを付けたわけでありまして、これが実は私は非常に不思議だと思ひますけれども、サダム・フセインが倒れた後、現在もイラクの国旗としてそのままとまっています。

最近来たイラクのサッカーの選手たちも胸に付けておるわけでありまして、この辺のところは彼らのアイデンティティーが定着しているのかなと思ひます。

第二番目に、実は、言わば成金国であつた中東の産油国でも財政が悪化する、インテリ失業者が増大する。特に、都市部門におきましてインテリ層が多くなつてきておりますし、就職難の時代に突入していると言ひます。また、民族自決、抵抗運動と。これはパレスチナが大本でありますけれども、チェチェン、そして現在イラク、これはテロではないという主張を国連の累次の議論の中に展開してゐると。

それから三番目には、グローバルイゼーションの環境でありますけれども、インターネット世代が増大して、世界のネットワークに直ちにつながるような世代が増えきております。これに応じた新しいニーズも出てきてゐると。

四番目には、これは日本に対する彼らのイメージの中で深刻な部分であります。ネオコン対テロ闘争と。言わば異文化を武力によって制圧できると、そして民主化の押し付け、あるいは民主化ドミノを回つていくというアメリカの新しい現在

の政策に日本は盲従しているんじゃないかと。これは今のイスラム諸国あるいは西アジアの人々と話すときにぶつつけられる問題であります。

五番目には、ルックイースト政策の消滅ということでありまして、マハティールが現役のとき、そして現在もイスラム諸国会議のイデオログとして発言をしたりしておりますが、どうも日本をお手本にしようといういわゆるルックイースト政策は何か撤回しているんじゃないかと。看板をどうも下ろしているようでありまして。

そこで、ハウツーでありますけれども、私は、日本に対する期待というのはソフトパワーとしての日本に期待する。

第一に、日本近代化の秘訣といたしまして和魂洋才を訴えるというのは、なかなかのアピール力があるのではないと思ひます。

第二に、日本近代化の秘訣といたしまして和魂洋才を訴えるというのは、なかなかのアピール力があるのではないと思ひます。

また、ODA、NGOにおける技術協力、特に医療分野における協力実績の拡大というのは、その協力に当たる医師あるいは看護婦が東洋医学の紹介も兼ねてそういうことを相手に訴へる。これは十世紀から十一世紀に近代医学の祖と言ひます、あるいは統合医療の祖と言ひます。イブン・シナがイランにて、またアラブ圏におきましても非常な現在尊重をされております。欧米においてもこのイブン・シナに対する評価は非常に高いものがある。こういったようなイラクの十三病院に対する協力を行う場合もこういったようなも

を考慮してこの医療を進め、医療分野における協力を進めるといふことは大切ではないかと思ひます。

二番目には、河野イニシアチブ、先ほどから両参考人が触れておられるところであります。これは是非イスラムの考え方、イランを知り得ることが人生最大の目的というのがコーランにもありますが、知的な交流といふものを、知的対話といふものは、この歯車がかみ合う分野である。これはいろいろな分野で考えられますけれども、あるいは女性、メディア、あるいはその他のいろいろな分野で交流していくといふことはいいのではないかと思ひます。もう既に国際交流基金とかそのほかのNGOを通じて現地のニーズに応じた講演、音楽、演劇、展示、映像文化、特に映画、漫画のたぐいでございしますね、既に行われているわけでありまして、より積極的に大幅に拡大していく必要があるのではないかと思ひます。

四番目には、言葉の問題であります。アラビア語は国連の公用語六ヶ国語の一つであります。イスラム諸国会議の中でもこのアラビア語の価値言語としての尊敬を集めているわけでありまして、したがって、まだアラビア語を十分にこなせる人は比較的少ないといふことは御指摘のとおりであります。外務省でも大体百人くらいはアラビア語がわかるわけですね。使ひ物になるかどうか、第一級の通訳とかあるいは翻訳家ということになりますれば少ないと思ひますけれども、これからアラビア語、ベルシヤ語、ヘブライ語といったような現地用語を作つて、もっと積極的に作つていかなければならないのではないかと思ひます。

最後に、これはまあ私自身、あるいは私の家内にもイスラム研究やつておりますが、二人のこだわりのなかでございまして、日本における公共施設にメディーションルーム、これは国連にもこのメディーションルームが国連発足以来あることは御承知のとおりだと思ひます。瞑想の部屋、折りの空間と。これは無宗教といふますか、特定宗教とはかわりないんですけれども、このメディー

でも、理由はといいますと、欧米でやつても南米でやつても物すごく混乱が起きてしまふ。戦いになつて、みんな熱が、熱狂を帯び過ぎやつて大混乱になつてしまふので、安全な国日本でやろうといふことで開催されたらいいんです。やはり世界の中でも、この中東においても、日本というのは欧米社会とはまた別の独自の路線で対応していくことが十分可能じゃないかといふふうに思ひますが、その点、この国日本がどのような対応をしていけたらいいか、三参考人の御意見を聞かせください。よろしくお願ひします。

○参考人(橋爪大三郎君) 大変に難しいことを尋ねられてしまつたという印象を持っておりますけれども、分る範囲でお答えしたいと思ひます。まず第一に、先方は国のほかにたくさん主

体があつて、しかも約束を厳密に守る文化でもないようなときどういふふうなアプローチをすればいいのかわからない御質問だと思ひます。まず、その政府が政府といふことでは、先方の政府も近代的な国家として国際法の枠組みの中で樹立されているわけですから、これは普通に対応していけばよい問題だといふふうに思ひます。

ただ、それ以外に、宗教的指導者とか部族長ですとか、こちらのよく、何というか、掌握できない、こちらに対応する機関がないような存在といふものがあつて、その影響力が無視できないといふ場合にどうしたらいいかといふことだと思ひます。

現状はこういうふうになつていきたいと思います。日本では、政府、外務省が現地にありまして、あと商社のような民間企業が出ておられまして、あと政府機関や大学の研究者とかばらばらに行つておられるわけですね。このばらばらな人たちがばらばらに行動していると、商社などを例に取りますと、商社といふのは基本的に適当利害を考えますので、有力者がいたならば、適当にプレゼン

トですね、を贈つたりした商売の便宜を図つてらうと、こういう情報を商社なりに集めて行動し

ていふことだと思ひます。ただ、個別企業にとつて最大の利益をもたらすような、そういうやり方が仮にあつたとして、全体の日本国の利益になるかといふことはまた別なうやつていけるけれども日本国としては、この地域との最善の状態を作るのにどうしたらいいかといふ戦略が必要で、その戦略がないという点が今我が国の一番の問題なのではないかといふふうに思ひます。

まず、橋爪参考人にお伺ひをしたいと思います。対話の主体、これは非常に難しいといふことをおつしやられましたけれども、じゃ果たしてその政府間の、政府間で仮にこう契約なり約束事をしたときのその効力とはどういふふうになつていくのか。また、いろいろ対話する相手もいると思ひます。例えば、部族長であるとか宗教的指導者であるとか、そういう方々に多分そうやつてい

る約束手紙とか契約をしていくと思ひますけれども、その効力といふのはどうなつていくのか。一部しか効かないのか、それともその一部においてですら人が替わればすべてここにされてしまふのか。どういった対応を我々はしてけば、日本としてしていけばいいのかといふことをお伺ひしたいと思ひます。

特に、先生おつしやられた利益、文化的、文明的なものでなくて経済的なものがメーンだと思ひますけれども、利益を与えていく必要があるといふふうにおつしやられたと思ひます。が、その利益をどのような形でどこにもたらすが一番有効なのか、先生の御見解を詳しくお聞かせください。

続いて、加藤参考人になんですが、研究が必要であるといふのは、私もそのとおりだと思ひますし、もつとつと深くこれはじっくりと取り組まなくちゃいけない、しかも早急に日本独自の情報を持つて取り組まなくてはならないといふふうには、全くの同意感であります。この点で、これも文明とか文化のみならず、その経済的視点です

ね、特にこの地域においては石油資源、天然資源といふことを無視はできないのであつて、この経済的視点の研究といふのを今までしてきたことがあるのか、それから、これからどのように取り組んでいけたらいいのか、御見解をお聞かせください。

次に、片倉参考人なんですが、イスラム諸国における対日理解といふことなんですけれども、これは大変恐縮なことで、僕もびつくりしたんですけれども、イスラム諸国で最近、随分前にも言われていましたけれども、改めて、一般の方々にすぐく人気があつたといふのが日本のドラマの「おしん」だといふことを改めて聞いたんです。随分昔から言われていた話なんです。今この時点でかなりブームになつていゝことを聞いてたんですけれども、果たして、「おしん」、随分昔の話です。今の日本とは全く現実的に違ふ話なんです。一般の方がどのように日本に対するイメージを持っておられるのか、それが一点と。

インターネット等いろいろだんだん普及してくるとは思ひますが、この情報が広がることによつて宗教的な価値観といふのも随分変容していきくんじやないかと私自身は思つていゝんですけれども、といひます。これは聞いた話ですけれども、イスラムの世界はほとんど情報のツールがなく、情報がなかつたおかげで、その部族であるとか、ほとんど言葉で伝統文化、価値観などを伝えていくといふことが、インターネットなどの情報が普及することによつていゝんな情報が入つて受け取れるという状態になつてきて、今までの宗教的価値観が随分変容してきたといふ話を私自身は聞いているんですが、この点について、どのような変化が起きているのか、御理解の範囲で結構ですでお聞かせください。そして、今後、どのようなイスラム社会、変容があつて、我々はそのように対応していけたらいいのかを御意見をいただきたいと思います。

最後になりますが、お三方にですけれども、さつきよくとサッカーの話が出たので、私自身も、これは余りにも稚拙な話で恐縮なんです。トヨタカップといふのがありまして、クラブチームの世界を一を決めるというサッカーの大会なんですけれども、欧米のチームの優勝チームと南米の優勝チームが日本で世界一を競つて戦つていゝことが日本で開催、十数年やられていゝんですけれども、

約を結ぶと思うんですけど、相手によつてはイスラム法を準拠して、イスラム法の考え方で行動している伝統的な人たちもいるわけですから、法の概念を明確に、こちらで文脈を理解していれば、相手は法に従おうと思つてくれるわけ、その点は、こちらが十分調査すれば、何ていうか、約束が予期しない形でここにされてしまうというところは防げるのではないかとこのように思つております。

○参考人(加藤博君) 今日、お話ししましたのは、日本中東学会及びその多くが大学で仕事をしている人間の話をいたしました。

その中で、社会科学の、とりわけ経済的な研究が少ないというのはそのとおりだと思います。しかし、もちろん日本では経済学的な研究をしている研究所はたくさんございます。例えば、日本中東経済研究所もそうですし、それからエネルギー資源については巨大な研究機関もありますし、です。で、決してないわけではありませんが、ですから、私がここで述べたいと思われた点は、大学の中で主流である中東あるいはイスラム研究の動向と、そういうシンクタンク的な研究機関でなされている経済、政治的な分析動向というものが必要というふうなことがついでにというところを御指摘したかったわけですね。

その理由はなぜかということ、これは端的には、アメリカのブッシュ大統領がアラブ諸国の全部のGDP、国民総生産、を合わせてもフランスのGDPの半分ぐらいじゃないかということ、これを演説で言ったことがあったとか言われておりますけれども、そんな極端ではないにしろ、中東・イスラム世界のほとんどは健全な経済を営めるほどの規模を持っていない小国ばかりです。ですから、私の友人、経済学をやっている友人によく言われるんですけど、中東の経済やつても面白くないだろうと、なぜならそれだけの国の規模が余りに小さ過ぎるのでやつても経済学的に面白くない。したがって、どうしても大学にいる人間は広域な、国家を超えた、例えば

ば経済だったらエネルギーの問題だと思いきや、宗教問題という形で国家を超えたところで研究をしがちな。それは中東・イスラム世界が極めて小さな国の集合体ではないという、その認識は非常に重要なことだと思ひます。

ところが、個々具体的に外交政治問題で対処するときには国単位で、例えば今イスラエルの問題に当たって、じゃ一体イスラエルの専門家がいるのかという、非常に限られた、それもよりグローバルな形でイスラムだとかアラブだとかいう、あるいはエネルギーの問題との関係の中でイスラエルの国をどういうふうな位置付けられるかということ、非常に難しいことに今なっているというふうに思ひます。

ですから、お答えは、経済学的な研究はこれまでになかったわけではありませんが、今後とも恐らくなされると思ひますけれども、それがアカデミックな中東研究者の研究と必ずしも一体化してなされていない、それは非常に重要なことである、このそこを克服するのは非常に重要なことであるという、これは繰り返してすけれども、中東イスラム世界というのが極めて小さな国の集合体ではない、しかし政治経済の現場においては国単位でしかなされることはないというところを指摘したかったことですね。

それから、よろしうですか、橋爪先生はおつしやいませでしたけれども、第三番目の日本の役割というかについて、いいんですか、ついでに、御指摘のとおり、私は会議なりなんなりその場というものは極めて重要だと思ひます。今、トヨタカプの例を持ち出されましたけれども、これは学生によく言うんですが、ユーラシア大陸、アジア大陸の中においてアジア大会に出てこない二つの国があるんだと言ふんですけれども、一つはイスラエル、一つはトルコです。恐らく私の印象の中では、私が小学校、中学校のころはイスラエルもアジア大会に出てきたと思ひつていました。つい最近までトルコは出ていました。

ところが、恐らくイスラエルがアジア大会に出なくなつたのは、アラブとの関係でサッカーの試合をするのを血を見るようなことになるかもしれないというので離れていったんだと思ひます。だけれども、それは恐らく内心は、ヨーロッパの方に自分たちは近親感を持っているんだと思ひます。同じことはトルコについても言えると思ひます。トルコは、ほとんどアナトリア半島のユーラシア大陸に位置しているにもかかわらず、つい何回か前のアジア大会から出なくなりまして、彼らはEUに入りたかったからだと思ひます。

ところが、この二国は、したがって中東の中では、あるいはイスラムの中では孤立しがちでありまして、けれども、そのときにエルを常に送つてくるのは日本なんです。ですから、その意味で日本は微妙な立場に立つていようけれども、日本が間に立てば、例えば会議の場を設定すれば二つの国も来るかもしれない。彼らはアジアと考えていいかもしれない、日本をアジアじゃないと、考えていないかもしれないけれども、そういうことはあると思ひます。ですから、どこで会議を開くのかということと対中東イスラム問題での理解の中で決定的に重要なことだと思ひます。

○参考人(片倉邦雄君) 愛知先生から御質問ありました「おしん」のことですけれども、これ、誠に一貫してイスラム、西アジア地域におきまして根強い人気がある。もう随分古い映画ではありまして、けれども、イラン、エジプト、そしてイスラエルにおきまして最近非常に人気番組として上映されているということなんです、これもイスラム諸国における対日イメージという面からいいますと、これ、美しき誤解といいますが、私も先ほど指摘いたしましたような日本人の、古き良き日本のイメージ、勤勉美、忍耐、そして我慢して一生懸命働けば出世できると、こういったような「おしん」のイメージというものが彼らに、しかし依然としてアピールするところが大きいんじゃないかと思ひます。

や古いイメージですがあれがあるんですけども、彼らの理想とする日本像というもの「おしん」に表れているのではないかと思ひます。これは黒澤作品の中での日本の侍のイメージ、これもまたあると思ひます。しかし、ここにずれがあるということはやはり事実でありまして、やっぱり新しい日本の、現在の日本のイメージというもの、日本に於いて実際に日本の実情をつかんだ場合につかりする面もあるかもしれない。そういう意味で、イメージギャップという意味ではちよつとおつかない面もあると思ひます。

サッカーのことですけれども、トヨタカプ、確かに日本で、欧米でなく日本で、あるいは中東でなく日本で開催するということは、やはり非常に適切なことではないかと思ひます。ドーハの悲劇と言われたあの一件が、しかし現在にまで日本、イスラエルの間のサッカー交流にすつとつながつていい影響を及ぼしている。勝つと負けただけでなく、やっぱりそれだけの肉弾相打ちといひます。汗とあぶらで交流するといひます。こういうことで重要なリンクになってきたのではないかと思ひます。で、常に日本は開催地として大きなサッカーの交流、サッカー交流の場を提供することはできる国だと思ひます。

それからインターネットの問題なんですけれども、確かにインターネットで直接映像が家庭、お茶の間に舞い込むという時代になってまいりました、また主要な中東の国々、あるいはイスラム諸国の国々で、都市部のみならず農村部におきましてもこのインターネットカフェが青年の間で非常に人気を収めております。これは、日本が広報あるいは情報提供する場合に非常にいい手段ではあります。しかし宗教的な価値観というものがあるおそれというのは、よりファンダメンタルな、何といひますか、非常に峻厳なイスラムファンダメンタリスト政権であればあるほど、そこに何らかの形で介入したり、あるいは制限したりしようとしておりますので、実際のところを言つて、なかなかインターネットもつながらないといひ

う国々もかなり多い。これは意識的に外からの電波が、あるいは映像が入らないようにしている国もかなりあると思ひます。

そういう意味で、なかなかインターネットを使つての広報が成功するかどうかはまだ実験段階であると思ひますが、しかし、私もごく最近サウジ、イラン、モロッコなどに行つて見ましたんですけども、BBC、CNN、フォックステレビ、そして最近ではアラビア語手段によるジャジーラ、それからMBC、サウジ系のミドル・イースト・ブロードキャストイングなどの各国に、ほとんど番組を送り込んでいるという状況でありますので、こういったようなアラビア語放送、テレビ放送というものが我が国の広報関係では大いに使つた方がいいのではないかと、善し悪しは別として、最近の自衛隊派遣について小泉発言も、実は字幕でジャジーラテレビでテロップで相当強力に流れておりまして、直でアラビア語を解する人々に対する訴えはかなりあったんじゃないかと私は思ひました。

○会長(関谷勝嗣君) ありがとうございます。

それでは、続いて田村秀昭君。

○田村秀昭君 民主党の田村でございます。

橋爪、加藤参考人に、お二人にまず質問させていただきます。

今、御承知のように、自衛隊がイラクに派遣されておりますけれども、国会でいろんな議論があらわれましたけれども、行く人の立場に立つた議論は一つもありませんでした。そして、自衛隊が海外に派遣される場合というのは、私は、大多数の国民が敬愛と感謝の念を持って自衛隊を送り出さなければならぬ、行く方も、何か半分の人が反対していて半分の人が賛成しているようなときに、何か悪いことに行くわけじゃないのに行くというの、どうも自衛官の立場に立つた場合には、はいかなものかと私は思ひますが、両参考人はどのようにお考えなのか。反対なら反対、賛成なら賛成、おかしいならおかしいとお答えください。

それから、片倉参考人には次のようなことを。私、最もアラビストとして、奥様共々、もとご令夫人共々、アラビア語を流暢に話されて、外交官として非常に希有な存在であつたというふうには尊敬をしておりますので、尊敬の念を持って質問させていただきます。

二月一日に旭川駐屯地で、番匠幸一郎派遣隊長に対して総理から隊旗の授与式がございました。私も、民主党では一人だつたんですが、出席させていたで、非常に感動いたしました。日々、余り感動の少ない日々でございますので、特に政治に感動がございませんので、非常に一瞬でしたけれどもいい感動をしたと私は思ひつております。

それで、その中で、派遣隊員のたちと会食をしたんですが、一人の下士官が、これは今派遣隊に行つて下士官、陸曹ですけれども、この人がこういうことを質問したんですね。自分は日本の国を守るために自衛隊に入つたんだと、イラク行くために、派遣されるというのは命とあらば致し方ないけれども、イラク行くために私は自衛隊入つたんじゃない。

それで、これは政府の説明が不十分だからだと私は思ひますが、片倉内閣総理大臣だつたらどのようにお答えになられるか、お尋ねをさせていただきます。こういう隊員が、なるほど、こういうことで自分たちは行くんだというのをもちと納得しない限り、説明責任が果たされていらないと私は思ひつておりますので、よろしくお願いいたします。

○参考人(橋爪三郎君) 第一の問題は、国論が割れている場合に自衛隊が派遣される、派遣される立場になつた場合、どのように考えたらいいかというふうな御質問だつたと思ひますけれども、この問題はとても簡単のように私には思ひません。

難しい政治的な問題であれば国論が割れるのは当然であります。そういうときはどこの意思を示さなければならぬわけで、その任務は国会に

ございまして、国会は法律を通し、正規の手続によつて正式な派遣命令が出た。公務員といたしましては、その公務に従うということは個人の意見とかかわらず当然のことでございます。そのために危険な任務を引き受ける。そういう公務に従っている公務員に対して、国民全体は意見を越えてその任務を全うするように祈り、また、万一不幸にも犠牲が出た場合にはそれを悼む。これは、党派とか思想、信条にかかわらず、非常に根本的な人間の倫理ではないかというふうに思ひます。

ですから、仮に国論が割れていても正式な派遣手続になつた場合には、そのことはそれ以上考えないということが一応正しい態度ではないかと思ひます。

ベトナム戦争のときにも同じようなことが起こりました。今大統領候補者になつておりますケリー上院議員が、個人的にはいろいろあつたのでしようけれども、しかしその任務を全うしたということで国民の間で評価されていますが、それに対してブッシュ大統領のいろいろな兵役の記録がはつきりしないということなんです。これは民主主義国でのやばい基本的な考え方であるといひうふうに考えております。

○参考人(加藤博君) この場では日本とイスラム世界との理解がいかにして可能かということにしゃべれというふうな、つもりで来ましたが、けれども、自分の政治信条を問われるとは、そう思ひませんでした。自衛隊の派遣の問題と、中東研究者として中東をどういうふうな理解するのかということとは全く私には違つた問題だといひうふうに考えています。

これは、もう二・一のとときからずっと言い続けてきたことなんですけれども、二・一以降世界で起きていることは中東問題ではなくてアメリカ問題なんだと。アメリカがどのような形で今後の中東というの、もちろんサダム・フセイン政権がどうのこうのといひことは別に、降つてわ

いたような事件だつたんだと思ひます。

ですから、二・一以降中東は変わりました。しょうか、どうですかというふうによく言われるんですけども、これは変わりました。だけれども、それは、主體的に動いたからではなくて、国際情勢が客観的に動いたから大変に変わったということとして、自衛隊派遣も恐らくその文脈で考えれば、対アメリカの政策をどう判断するかと、アメリカと日本との関係をどう判断するかと思ひます。ですから、この時点で私が賛成か反対かというところは差し控えますけれども、日本が今の状況を作り出したアメリカとどう付き合つていくのか、その政治判断だと思ひつております。

○会長(関谷勝嗣君) 加藤参考人がおつしやられましたように、どうぞ御自由に御意見を述べていただく調査会でございます。答えたくないことは何にも答える必要はありません。

ちなみに、田村委員は防衛大学校卒業第一期生でございますから、そういう、どう言ひましょうか、生い立ちの方でございますので、まあ多少失礼な質問になつたかもしれませんが、調査会長として仲を取り持たたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

○参考人(片倉邦雄君) 私、冒頭に申し上げましたように、イラクに十三年前、第一次湾岸危機のときに大使館を預かつておりまして、そのときに二百数十名の邦人入質をサダム・フセイン政権によつて取られたわけでありまして。そういう意味で、そのころ、早く釈放せよということでも連日のようにサダム・フセインの政権の指導者に働き掛けをしてきておりました。

まあ、バース党政権の責任者であつた、あるいは市井のイラク人であつた、やはり相手はなかなか海千山千の、アラブの中でも、例えばエジプト人に比較したとしても、さんざんオットマン帝国、それより前にモンゴル、オットマン帝国、イギリス、ロシア等に征服され、占領され、そういったような経験がありますので、海千山千であると。しかし、当時に独裁者であつても

もう最初からバイアスが掛かっているのかなという気がいたんですが、中東の歴史とか文化とか

先生の言葉をかりれば、彼らの思考と行動が予測できるといふことが一番大事なんだと思うんですが、そういうことからするという行動なり思考が掛かった研究をしないとそういう研究はないのか。そういう研究はなかなか読めないんじゃないか。そういう研究に基づいて中東に民主化をするというのは、あるいは民主化を推し進めるというのは非常に無理難題があるんじゃないかと思うんですが、その辺どう

片倉参考人には、アラビアの専門家として、なぜイラムあるいはアラブ系の人がテロリストに、テロに走りやすいのか、これはどういうふうにとらえておられるのか。

それからもう一つは、自衛隊のイラク派遣後、もし現場にいたとしたら、どういう説明をすればいいのか。イラクの国民というのは納得し歓迎をするのか、御意見を伺いたいと思います。

【参考人 高橋大三郎君】 お答えします。

まず、文明間の衝突ということをどういうふう
に考えればよいことなんでしょうけれども、
御承知のように、サミュエル・ハンチントンとい
う学者が十年ぐらい前に最初に小さな論文でこの
フレイズを使いました。

当時は、歴史の終えんとか、何か幾つかある提
案の一つだったんですけれども、専門家の間で
は、本当にそうかなということでも、必ずしも賛成
を得た意見ではなかったです。しかし、専門家を
除いた一般ジャーナリズムの間で文明間の衝突
ということが非常に流行いたしました、なお九・

「一事件もありましたことから非常に大きな影響力を持つ言論の潮流になったというふうに考えています。ですから、専門家の考え方と一般の受け止め方との間に大きなギャップがある議論ではないかというふうに思います。」

これだけ一般に流布している考え方となった理由には、二つぐらい理由があると思うんですけれども、

きたと思います。考えて、国益の問題と研究者の

バイアスの問題。国益の場合には、これはもう国際関係論、国際政治経済の場でアメリカがどのような形をするかということが問題であります。研究者の件については、これはアメリカ、例えばキリスト教対イスラムというような対立というふうに見て、キリスト教徒とイスラム教徒は相とにも理解できないんじゃないかという議論が展開されますけれども、アメリカの対イスラム世界、中東世界理解にゆがみをもたしているのは恐らくユダヤ教の問題だと思えます。ユダヤが入ることによってとにかく錯綜したものになっておりま

して、それが意味では原理主義的な突出したところで結び付いてしまっているようなところがあるのが今の状況だと思います。

ですから、そうしたアメリカの研究レベルにおけるバイアス、それは例えばイスラム教徒の若い人たちは非常に敏感に感じておりまして、例えばイスラム教徒、中東の人たちは、余りアメリカ文化に、自然科学は別にして、人文・社会科学へは留学したがりません。それは、アンチとは言いませうけれども、イスラムあるいは中東に対してネガティブな評価をする先生たちがほとんど、有名な大学ほどそうだといいふうには彼らは思い込んでいます。

このように、バイアスについてもそう単純なものから思ひ込みが実際によく分かっていませんけれども、それで例えばカナダのマクギル大学、だとかいう、ある意味で中立的な大学に流れる傾向がございます。

のではないということが一つと、同時に、今の状況、私困つたものだと思ひますけれども、それはアメリカの国益レベルでの問題と、それからアメリカにあるアカデミズムの中のバイアスというのが結び付いてしまつたような形で、ちよつとアメリカは強引なあのような行動を取つていゝといふふうには私は非常に思つています。ですから、バイアスといつても単純ではないということだけを一つ。

もう一つは民主化の問題、これはもう大変な問題でありまして、どういふふうに答えようかというふうにおどおどしますけれども、ただ、一つ御理解いただきたいのは、イスラム世界でイスラム、イスラムと言っておりましても、イスラム教徒だけの世界ではないんだということです。イスラム教徒にも様々なセクトがありますし、一〇％強ぐらいはありますけれども、非イスラム教徒も住んでいるわけです。ですから、イスラムですべてが中東だとかイスラム世界の問題が片付くかなんというところでもない大間違いということになります。

それで、例えばサマールワ等々で自衛隊が行って平和が維持されるかもしれない、してほしいと思いますけれども、しかし政治を行っていきながら考えてほしいのは、サマールワでの平和がイラクという国家の平和に必ずしもつながるものではないということなんです。それは、サマールワはある意味では、シーア派がどのぐらいのか私存じませんが、けれども、多数であって、シーア派を押さえればそれで済むというふうに考えていられると思うんですけれども、しかしサマールワを出た場合の地域がどういふ人たちが住み、どういふものを考えているかということは必ずしも一緒ではない。したがって、それが足し算のようにしてイラクという国家の平和につながっていくものではないんだ。したがって、非常に大きな枠組みというものを必要とすると、民主化というのやはりそうだと思います。

ですから、戦略として民主化はどう、アメリカ的な民主化は、私は無理じゃないかと思っはいるんですけれども、民主化というやはり枠組みは作るべきだと私は思います。だから、そのときにどうするか、私の能力に余る問題でありますけれども、ただ様々な思想を持った人たちがいるんなレベルで争い合っているのが事実です。ですから、イスラム教徒と非イスラム教徒、イスラムの中でもそうですし、民族的にもそうです。ですから、その中で、穏健で、我々が理解可能

なセクトも、人たちもいるわけですね。ところが、そういう人たちはしばしばテロに遭ったりして死んだりなんかして悲惨な状況にあるわけありますけれども、やはりそういう人たちを見分けてサポートして、そういう人たちを中心に民主化を図っていく、そうしたことがないんじゃないかというふうには私は思っています。

○参考人 片倉邦雄君 まず第一に、高野先生が提起されました、なぜイスラム・中東地域においてテロリストがどんどん出てくるのか、この点です。テロとかテロリストというのは、これまで定義をすることになりますと、国連の議論でもも本当に議論百出、日本の学者でも、おっしゃる一人一人によって定義が違ってくるようなので、私はこれを、非常に現象面を具体的に考えて現象としてとらえた場合には、やはりある政治的な動機があつて、そして暴力とか威嚇、そして自爆その他か自殺といったような異常な手段に訴えて非難の拡散効果をねらう、往々にして不特定多数の悲劇的、一般市民を巻き込んだ行動である、こういうふうには考えるわけです。

そこで、イスラム起源のテロがいつから起こったかというふうに考えてみると、これは一九六〇年代、エジプトでいわゆる防衛的ジハード、聖戦という考えが特に出てきて、ジハードというのは元々、アラビア語で努力するといったような非常に日常的な言葉でありまして、外敵、外敵の侵入とか、あるいは暴虐な支配者というのに対しての抵抗、その論理としてこの防衛的ジハードという言葉が起つてきたのは、一九六〇年代の、特にエジプトでイスラム同胞団とかイフワーン・ムスリミンと言われた人々、そしてガマール・イスマーイーヤ組織、こういったようなものが中心に、この防衛的ジハードのイデオログが出てきたわけでございますね。

だけれども、実際の脅威として顕在化するのはい九七九年のイラン・イスラム革命以降、特にこれが出てきたと思います。そして、冷戦が終わつて、アメリカの一方的な行動主義、しかも唯一の

スーパーパワーとしての圧倒的な軍事力に基づき、軍勢力を万能とするいふゆるテロの防圧、これに現在相呼応するようなイスラエルの占領政策、占領行政が暴力化してきている。この現象に対してパレスチナ人を中心に猛烈な反発と抵抗が出てきたということではないかと思ひます。

イラクで起つていふことも含めまして、よく考えてみるならば、中国の戦略家、孫子の言葉ではありましても、どうもアメリカは敵の内情もよく知らないで武力の強大さを誇示して、最新兵器を頼つて力づくで押さえるやうにして、これでも、相手はもうサダム・フセインの残党にしろ、あるいは一般的な、一般市民の、特に肉親を殺傷されたやうな連中が恨みつらみというところで必死になつて抵抗している。

やっぱり敵国の、敵国といふことも、かつての敵国の文化、価値観といふものを十分理解することなくこの戦いを敢行してしまつたということに現在のアメリカの占領行政の悩みがあるのではないかと。特に、今、人口六〇％を占めるシーア派の動向といふものを十分察知できないで、単なるサダム・フセインに対する抵抗勢力といふことでこれを信頼した。一定の信頼を、期待感を持つて戦争を終結させたといふところに現在の問題があると思ひます。

それから、第二の問題、これ大変難しいんですけれども、自衛隊のイラク派遣をどのように現場の住民に説得させるかといふことでもあります。これは、一つは、第一の点は、サダム・フセインの統治下でありましたけれども、日本はイラクに對しまして一時は七千億圓ぐらいの混合借款を与へ、国づくり、特に十三病院とか石油関連プロジェクト、尿素プラント、あるいは製油所、それから教育施設、水利その他やつてきたわけでございます。これはもうもうバース党政権に神託したといふことには思ひますが、しかし、一般の人民としても福祉面での非常に利益するところがあつて、現在も私は友好の言わば貯金が、友好の貯金がまだ残つていふ。サマールワにおきまし

ても十三病院の一つがあるわけでございます、これを復旧してもらいたいというやうな期待は大きい。また、止まりがちの飲料水ですね、これの過をやつてもらいたい。したがって、こういう期待に対して一刻も早く、水の一滴でも早く出してやるということが必要であり、とにかく目に物を見せなければ彼らはやはり信じないという面があると思ひます。しかし、まだ残つていふ友好の貯金。

第二の問題は、やはり、そういう意味で日章旗を付けて、日の丸を付けて来ておりますが、しかし知る人ぞ知るで、アメリカの占領行政の一環である、こういう見方が当然あるわけでありまして、これに対する抵抗、反発といふものもいふれは出てくるであろうから、日の丸といふものも安全な、何といふますか、葵の御紋ではないわけですね。

私は、どうしても早く、これは非常に難しい、六月の末までに主権の移譲をするということにはなつておりますが、これがずれ込んでくると思ひますが、しかしできるだけ早く国連の枠をかぶせて、そして自衛隊の皆様にブルーヘルメットをかぶつていただくと、国連旗の下でこういう復興支援を行つと、こういう切替えをできるだけ早くやらなければ、やはり何らかの形で犠牲が出るということが予想されると思ひます。これは非常に深刻な問題だと思ひますけれども、住民説得の手段といふのは限られていふと考えます。

○高野博雄君 ありがとうございます。
○会長 関谷勝嗣君 ありがとうございます。
次に、緒方靖夫君。

三人の先生方、本当にありがとうございます。最初に、片倉大使にお尋ねしたいと思ひます。大使、それから夫人の著書や事典はいつも使わせていただいております。

私は、この二、三年の間、イスラム諸国をかなり訪問する機会がありました。その中でサウジ

アラビアを訪問したときに、ジッダでOICの事務局を訪問して、それが機会になりました。ちょうど昨年の十月にマレーシアでOICの首脳会議が行われたときにそこにゲストとして参加するという、本当に貴重な機会を得ることができたんですね。そこで改めて感じましたのは、イスラムというのは平等、平和、寛容、それを表しているということを感じてまいりました。

今日のテーマでいって、私が一番思うのは、対話で一番大事なことは何なのかということなんですけれども、結局、互いの価値観を認め合う、そしてある特定の価値観を他に押し付けない、これが一般的に言つて非常に大事な点かなと思ひます。その点で、よくイラクの民主化ということが言われるわけですが、その内容がもし仮にアングロサクソンの価値観をイラクに持つてくるということならば、これはやはりなかなか成り立たない話ではないかと思ひます。

そこで、イルムのお話がありました。知的対話といふのが何をもちつて成り立ち得るのか、これを長い経験をお持ちの大使にお伺いしたいと思ひます。

それからもう一つ、瞑想の空間のお話がありました。これは私もいつも痛感するんですが、どこへ行つても、どこでもそれが可能な場所なんですね。それが国際都市としての資格みたいなものだと思ひます。例えば、極端な話、これは特殊かもしれませぬけれども、サウジの飛行機に乗つたら、サウジの飛行機の後ろの方には十何席かの分を、お祈りの空間を取つていられるわけですね。しかし日本では、あつてもそこに十字架が掛かつていてとかそういうこともあつたりして、結局すべての宗教に対応できる瞑想空間はほとんどないといふのが実際だと思ひます。ですから、それがなかなかできないというお話をいただきました。

これは、恐らくこの問題については、関谷会長にそれからまた委員の方にもお願いして、やはりこの委員会として、恐らくこれはもう当然のことじゃないかと、なぜそれができないんだといふ

ふに大使の話聞かれたと思うんですが、皆さんは、ですから、これは是非御尽力いただいて、やはりこれができるようにするといふことが、東京にあるいは日本のそのほかの主要都市が国際都市として通用する資格でもあると思ひますので、そんな気持ちでお聞きしました。ですから、この問題について、もしここで話して差し支えないことがありましたらお聞きしたいといふふうに思ひます。

それから、加藤先生にお伺いしたいのは、イスラムの中の非ムスリム部分というのは当然あるわけですが、同時に、非イスラム国の中でイスラム人口があるというケースがあると思ひます。これは、例えば昨日、ちょうどジャバ・ファウンデーションと中東調査会などがイスラム共生という、そういうシンポジウムがありまして、大変面白く話を聞いたんですが、そこでタイのタクシン首相の政策主任顧問をしていふパンサックさんが話したことが大変面白かつたんですね。

つまり、タイという国は、人口で七％、パーセントはいろいろありますけれども、そのぐらいイスラム人口がある、だから、仏教国であるけれども、同時にそれだけのものを抱えて、この間ずっと平和的に共存してきた。そしてまた、今、近隣の諸国ともこの間共存してきた。しかし、これがイスラムの中でなかなか騒がしいことが起こつていふ中で、なかなか難しい問題も起きていふという話をしながら、しかし、自分たちは外交政策の中でイスラムをきちつととらえて、そして自分たちの外交を進めているんだという話をし、その話を聞きながら、なるほどA.C.D.というの、そこから生まれていふんだという、その戦略性と視野を感じたわけですが、そういうイスラムの人口が一定程度を占めているという国々の中で共存していくという、そういうケースを研究したら、日本のイスラム人口といふのは数えてみたら、何か聞くとところによると一万人ぐらいい

るといふんですが、ですから、日本ではなかなかそういうことは成り立ち得ないと思ひますけれども、イスラムと付き合う上で非常に参考になることが多いのではないかと思ひます。ですから、その点について先生のお考えをお伺いできたらと思ひます。

それから、橋爪先生にお伺いしたいんですが、イスラム全体と対話するときにはちょうど象とネズミですかの関係になつてしまふといふ、そういうお話がありました。確かにそういうことになると思ひますけれども、同時に、イスラムといふのは大変多様だと思ひます。イスラム諸国の中にも紛争を抱えている国もある、領土問題もある。ですから、結局、イスラムを代表してそういうつもりで話す人はいるかもしれないけれども、結局、個々の国との付き合いということになるのかなと思ひます。

そうすると、結局、例えばイランの人たちと話をしたらアラブと混同するたびに抗議が返つてくる、もうそういう特徴がありますよね。ですから、そういうことで考えると、個々の国の特徴とか歴史とか文化とか、そういうことを見た関係で、あるいはそういう対話ですが、そういうこととが必要になるのかなという感じもするんですが、その分野での方法論といふますか、それについてお伺いできたらと思ひます。

以上です。
○参考人 片倉邦雄君 緒方先生、緒方委員の方から御指摘ありました点でありますけれども、確かに世界人口の中でイスラム人口といふことになつて十二億と十三億、推定、その中でイスラムの発祥の地であるサウジを、サウジアラビアを中心とした中東は二億余りといふことになると思ひますけれども、非常に多様な、スンニ、マジョリティーのスンニ、そしてイラン、イラクを中心とするシーアその他、いろいろなニュアンスを持つた非常に多様な存在だと思ひます。しかし、そこに共通項が当然あるわけでございます、御指摘のように、非常に平等な、平和的な、

とをさせていただいた私は思っておりますが、公共施設でもそういうふうなことも行われておりますので、空港とか、あるいはホテルとか、そういうところでメディア・ショールームができるのもそう遠くないんじゃないかと期待しております。

この知的な対話、確かにイラムを交流しようということがあります。私は、やはり参加者、今までのような学者、研究者に偏ってはおりませんけれども、もっと広く経済、技術面の方々、実際に経済にかじを取っている方々とか、それからもちろん芸術、映像面の方々、そして女性、メディア、さらに宗教関係者なども含めて、非常に多角、できるだけ多角的な、多角的な交流が行われることが望ましいんじゃないかと、こういうふうと考えております。

○参考人(加藤博君) 御質問は、国家、主権国家の枠組みとイスラム教徒の関係というふうには私は理解しました。その際、恐らく国民のマジョリティーがイスラム教徒であるかあるいはマイノリティーにしかすぎないかは決定的に大きいと思います。ですから、それを混同して議論すると、イスラム、アンチイスラムかプロイスラムかのような議論になりがちだと思います。

マジョリティーの話は今御質問にはありませんでしたので、マイノリティーがイスラム教徒の場合の問題というふうな質問をとらえましたけれども、これは橋爪先生がちらっとおっしゃいましたけれども、イスラム教徒あるいはイスラムという宗教に対する不気味さ、これは欧米の人たちでも、また日本人も一部感じていたと思いますけれども、それは恐らく、彼らにはイスラムの、例えばカトリックのバチカンのような権威、権力の中心がないということですね。

ですから、常にアナーキーな状態でイスラム教徒は宗教生活を行っているということをして、基本的には人々との結び付きでしかないわけですので、アメーバーのようにどんどん広がっていったらいいと思います。それは、当然それは国境がないわけですので、主権国家を担っている担当者

としてはとんでもない脅威を感じるというのはよく分かることだと思います。ですから、恐らくどこかで臨界点があるんだと思います。

イスラム教徒がマイノリティーである、それで共存できるというふうな形でおおらかに構えておられる段階で、ちょっと待てよと、国家という枠があるにおおれたちよと少しは国家を尊重しようというような段階が恐らくどこかに来るんだと思います。ですから、その段階がどこにあるのかというのをお国の事情によるんでしようけれども、その二つははっきり分けて考えるべきだと思います。

日本の場合には、これはもうマイノリティーというが、余りにもマイノリティー過ぎますので、日本人が国家の中でイスラム教徒がどういうふうな議論がなされ、研究もなされていくというふうなことも、恐らく余り重要な意味を持たないほどのマイノリティーなんだと思います。

面白いのは、例えば、最近の若い研究者はその辺は非常に柔軟な頭でもって研究しているんだなと思うんですけれども、日本にいるイスラム教徒を研究したり、あるいはイスラム教徒の男性と結婚している日本の女性等々にインタビュー等々しているわけですが、面白いのは、今、片倉先生がおっしゃいましたけれども、ハラル料理、要するにイスラムでなきゃ駄目な、イスラムで禁止されている料理の店はイスラム教徒がいるところ、いろいろあるところにあるわけですね。

でも、住民は別にイスラムが禁止していない料理なんという大げさなことを考えないですね。子供がアトピーで悩んでいたからベビーフードしか食べられないわけですね。健康食品といっても余り脂っこいものは食べないわけですよ。今、日本の食生活、日本人の食生活というのはいろんな形で展開しているわけであって、そこにエスニックなイスラム料理があつたって何ら構わないじゃないかという考えでハラル料理、いろいろなところ、研究者はそれは何か社会にあつてき

を起こしているんじゃないだろうかという、常に

そういうふうな思ってしまう。特に、結婚の問題もそうでありまして、我々注意しなくちゃいけないのは、例えば日本人の女性がイスラム教徒の男性と結婚すると、きつと思えば、信条が共通で、イスラム教徒の多いところというふうに根拠を葉掘り聞くわけですね。ところが、本人は、そんなことはありませぬよと、通常の日本の男性とたままり合つて結婚しただけなんです。結局、ただ結婚した男性がたまたまイスラム教徒であつたということだけだ。信仰心厚いイスラム教徒の男性であるならば、結婚した女性をイスラム教徒にしないまでも、例えばユダヤ教徒とかあるいはキリスト教徒にするかもしれません。

それはそれで許されるわけですから、それで済んでいたわけで、たまたま結婚した男性がイスラム教徒であつたと、これで済むんですが、必ず問題があるのはその男性が母国に帰ったときです。一緒に帰ったとき、そのときには必ず社会的なあつてきでノイローゼになる。こんなはずじゃなかったと言つて帰つてくれば、それは日本のイスラムがもうマイノリティー過ぎて余り社会的にも問題にもならないということなんだと思います。それはまだ日本は幸せな不幸なのか知りませんが、これはイスラムとの関係における日常生活のレベルではそのようなレベルにあるんだと思います。

ただ、それがもつと大きな社会集団になり、さらにそれがマジョリティーを脅かすほどになると全く違つた政治社会問題が出てくるんだと思います。

○参考人(橋爪大三郎君) イスラムは多様であるので国ごとの個別の付き合い方があるのではないかと、そこについての御尋ねだつたというふうな思ひます。確かに、イスラムという世界といつても多様でして、御質問のように国ごとの対応というのがあつてよろしいのかと思います。概略的に私の印象を申し上げますと、イスラム世界の周辺部、その外側は非イスラム圏だという国の

場合は、比較的自分たちがイスラム国家であつてそうでない国もあるということ意識している場合が多くて、国というものをまともにしていると思ひます。こういう場合には国対国の付き合いになるので比較的簡単に付き合える。マレーシアとかインドネシアとかパングラデシュとかバキスタンとかいう国は、国という意識が非常に強いというふうな思ひますね。エジプトも入れてもいいのかもしれない。

しかし、その反対に、中東という地域はもうど真ん中であるために周りにイスラムで、逆に国という意識が非常に少ない。こういうところはイスラムという茫漠とした意識を持っている人が多いので、我々として戸惑つてしまつたということとを申し上げたわけなんです。

もう少し詳細に見ますと、どの国にも政治的リーダーというのがあるだろうと。それから、西洋化した知識人というのがあるわけですね。こういう人たちは国という意識を比較的持っていますので、普通に交流ができます。

ただ、イスラム圏はそのほかにイスラム知識人という人たちがいて、大抵イスラム法を研究したという知識人なんです。この人たちは、どうも私の見るところ、国という概念との間に距離があつて、むしろイスラムというアイデンティティーをしっかりと持っている人がいる。それから、そのほかに膨大な数の民衆がいるわけですね。でも、中東地域などですと、何というか、国とは違つたアイデンティティーを持つていう人たちが一緒にいる。イスラム世界にもこの知識人や民衆の組合せがいろいろ違つてタイプが何種類もある。この国の場合にはどういうふうなタイプに分類できるのかと、そしてその場合、この国で影響力を持っているのはだれで、働き掛けるのはじやだれをターゲットにしたいのか、これを個別に研究していくということが御指摘のように必要になるんだと思います。そこから先は私は専門家に任せて詳しくはお答えできませんが、おおむね私の考えを申しました。

○緒方靖夫君 ありがとうございます。

○会長(関谷勝嗣君) 次に、大田昌秀君。

○大田昌秀君 社民党の大田でございます。よろしくお願ひいたします。

最初に片倉先生にお聞きしたいんですが、先ほどのお話で、マレーシアのマハティールさんの話があつたと思いますが、どうしてかということですね。なぜそのような状態に至つたかということとを簡潔で結構でございますのでお願ひします。

それと、今もちょっとお話がありましたけれども、エジプトの国民は今イスラム戦争についてどのような対応をしておられるのかということですね、政府も含めてですね。時間がありませんので簡潔にお願ひいたします。

それから、加藤先生にお伺ひしたいのは、先ほどのお話で、中東研究者が学会に約六百五十名ほどいるというお話がございましたけれども、生徒たち、学生は一体どれくらいいるのか、もしお分

書きですが、一般的にはよく混同されていると思ひますけれども、テロと特攻隊の違いというのは基本的にどういうところにあるか、ちよつと教えていただきたいと思ひます。

○参考人(片倉雄雄君) マハティールが特に現役のときに、やはり日本の近代化のパターンとい

ますが、また日本人の勤勉さ、それから独自のアジア的な経営方法といふことが、非常に人間的な温かみのある、そういうファミリービジネス的な手法、恐らくホンダとかそういうところがパターンになつていたと思ひますけれども、こういうものによつてジャバ・アズ・ナン・バワンというような、ナン・バワンにならんとするような勢いで昇竜のように伸びてきたアジアのお手本日本と、こういうイメージ持つていたと思ひますね。

しかし、マハティールがたしか辞めてからの発言だと思ひますが、どうも日本はこれの若者はよく働かないと、それからフリーターがいて割合のんびりだらりとしておると、余り手本にはならぬのじゃないかと。そしてまた、グローバルイズムといふことが、市場経済の流れにすつかり身を任せて、独自の経営といふことが、そういうものもだんだんなくなつてきているというふうなところから、即ちばばと尊しというふうなパターンというふうなことを考えていた日本といふものを指してのルック・イーストといふものを何かこう取り下げていったのではないかと思ひます。

それから第二のエジプトですね。政府、それから企業、メディア、それから知識人一般と、それぞれによつていろいろイメージは違つてくるので、ざいによつて、イスラム戦争、特にアラブ連盟の所在地でもありますが、元外務大臣だったアムル・ムーサといふのが今アラブ連盟の事務局長になつておりまして、彼なんかの言動を特に見ますと、やはりイスラム戦争についてはできるだけ早く占領行政はイスラム自身によつて選ばれた政府に早く移管しなければいかぬということで、厳し目で見

見ているのではないかと思ひます。

辛うじて、日本のインシアチブもありまして、日本と協力して医療協力をやろうというふうなところは実際に手をかしていると思ひますけれども、復興支援につきましても、若干腰が引けているのではないかと私は見えております。

○大田昌秀君 ありがとうございます。

○参考人(加藤博君) 今、資料を探していたんですが、私も、もしお必要であればあらためて、SSR C用に、日本のどの、どういう機関でアラビア語が教えられているか等々、生徒の数までは把握してないかもしれませんが、もしよろしければお渡ししますけれども。

しかし、直接的なお答えにはならないかもしれませんが、イスラム研究あるいは中東研究の問題、私

は相当な水準に今あると思ひますけれども、国際的にも、ただ、日本においての最大の問題は何かという、東京に集中してしまつていてということですね。

有名な先生たちもほとんど東京です。関西にやつと今力を入れて、京大とかほかの大学で力を入れたつてありますけれども、圧倒的に、オビニオンリーダーといふことが、中東・イスラム関係の研究者は東京におります。特に、これは私は非常に問題だと思ひますけれども、東京大学が一番多いですね。したがって、なかなかイスラム理解といふものが地方に及ばないということが明らかにあると思ひます。質はいいんですけれども、その広がりにおいて非常に欠けているところが中東・イスラム研究にはあると思ひます。そして、イスラムに関心である、主に東京、大学に先生がおられないわけですので、東京でも研究所に多くの先生がおられます。ですから、学生と直接接する学部のレベルで生徒たちが中東・イスラムに興味を持つてもなかなかアクセスできない。イスラム関係の、例えば東大外語とか大阪外語とかい

うような語学校と、あと歴史等々の文学部が多くて、法学部、経済学部、社会学部等々の社会科学

2004. 2. 18

参議院・国際問題に関する調査会
「イスラム社会との相互理解促進のための課題」

参考人 橋爪大三郎（東京工業大学大学院教授）

文明間対話の継続

1] 対話の主体は誰なのか

- 1-1 日本 ……「外交は国（政府）が独占する」という観念
イスラム圏 ……イスラム共同体（ウンマ：民族、政治的国家を超越した存在）
国家（政府：人為的組織）
地域社会／部族／家族
- ・イスラム社会では、国家（国民）の輪郭がはっきりしない。
 - ・イスラム社会では、外交（国家と国家の関係）と、それ以外（友好・交流）との関係がはっきり区別されていない。
- 1-2 日本 ……文化以上で、文明未満
イスラム圏 ……文明（民族や地域社会を統合する共通の考え方・行動様式）
- ・日本社会／イスラム社会、は対等でない（イスラム社会のほうが広い）

2] 対話はどうやって成立するのか

- 2-1 日本社会を説明する言葉をもつ （言葉とは、実は、概念のこと）
- ・ある社会の制度、文化、思想、価値観は、暗黙の前提で成り立っている。
 - ・暗黙の前提を意識して、言語化しないと、自分を説明したことにならない。

2-2 日本語 ⇒ それに対応する言葉（概念）が、相手の言葉にあるとは限らない

英語 ⇒ キリスト教圏の偏り（バイアス）がかかっている

アラビア語 ⇒ 1) アラビア語ができる日本人が少ない
2) 現代日本語はアラビア語と対応するようにできていない

2-3 相手社会が説明を理解（誤解）するプロセスを、あらかじめ想像する

- ・どんな社会も、自分になぞらえて、相手を理解（誤解）する。
- ・よりましな理解に導く相手社会の文脈を、こちらから示唆することが望ましい。
- ・対話→理解→友好、という方程式は簡単に成り立たない

3] 国（政府）はどのように文明間対話を支援すればよいか

- 3-1 日本社会が理解され、相手社会が理解できることの利益を、よく認識する
利益 ……安全保障、経済、文化交流 相手の思考と行動が予測できる
- 3-2 その利益にみあった資源を、対話のインフラ整備に向けて投資する
- ・日本の基幹図書の計画的翻訳 文部科学省（文化庁）の任務
 - ・文明ごとの研究機関の設立 アメリカ研究所、イスラム研究所、など
 - ・文明間対話の長期計画と、競争的研究費の配分